

# せいりょう園

[発行] 社会福祉法人はりま福祉会 特別養護老人ホームせいりょう園

〒675-0016 兵庫県加古川市野口町長砂 95-20 TEL 079-421-7156 FAX 079-421-6422

平成22年 9月 第115号 年間購読料1,000円(1部100円)

メール seiryoen@bb.banban.jp ホームページ <http://www.seiryoen.or.jp>

## 看取り介護が地域を救う

高齢者にとっては、自らの人生を締め括る事が、そして次の世代に社会を引継ぐ事が、人生で最後の、かつ最大の役割です。80年～90年と生きてきた人生の集大成の姿に誇りと責任をもって、人生を終えたいと願います。

老いて様々な機能を失う中でも意欲を失わずに暮らし、死に向き合いながらも最期まで懸命に生き抜く姿を見せて、人生を締め括ります。その姿が、次の世代の人々に様々な想いと経験を通して生きる力を伝え、社会性を育み、縁をつなぐ大切な絆を生み出します。

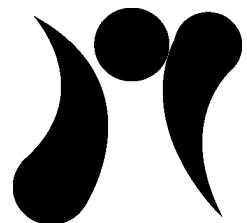
しかし現実の介護現場では、要支援や要介護1,2の方々には、機能の改善を目指すアプローチを様々多様に提供していますが、重度化すると施設に入所し、最期が見え隠れすると病院に向かいます。重度の人が地域で暮らし、そのまま地域で最期を迎える場面は少なくなり、家族や介護職が看取り介護に取り組む現場は、非常に少なくなっています。

地域包括ケアは、地域住民相互のネットワークの構築を重要視し、地域包括支援センターの主要な業務ともなっています。予防重視型システムの下で、要支援や軽度要介護者の方々を支えるネットワークは多様に創られますが、重度化すると住民相互の限界が強調され、施設や病院への依存が強くなって、多くの要介護者が地域の介護現場から離れて行きます。

住民相互のネットワークが、重度化した要介護者の暮らしを地域で支えるネットワークであり、地域の中で看取りを支援するネットワークであって欲しい、と願います。其れが、地域住民の縁をつなぐ大切な絆となります。

人生を締め括る姿に触れるとき、其処には一方通行ではなく相互にケアする関係性が生まれ、介護者も多くを学びます。看取り介護の過程で家族や介護職は、命と向き合い、死と出会い、悩みや迷いの中で貴重な経験を積み重ねて、介護者としても一人の人間としても、大きく成長していきます。

《次ページに続く》



人生の締め括り方は、人により夫々に違います。夫々の人生に相応しい姿で、人の数だけ多様な看取りがあります。多様な看取り介護に関り、多様な人生に触れ、深い思索を繰り返して、予防の介護現場では経験できない、より深い思想に出会います。ケアワーカーとして、ケアマネジャーとして、ソーシャルワーカーとして、介護と福祉の専門性を高める絶好のチャンスが看取り介護に潜んでいます。看取りでの出会いと実践を大切にしたい、と願います。

最近、生死不明の高齢者が多数見つかかり、縁が希薄な社会の出現に戸惑い、無縁社会を実感しています。しかし、社会性は人間の命綱であり、縁をつなぐ絆として、生と死をつなぐ看取り介護が重要な役割を担う社会になった事も実感します。看取り介護と其れを支えるネットワークに、人と人との縁を繋ぎ止め、社会性を育む鍵が潜んでいる事を確信します。

せいりょう園 渋谷 哲

#### せいりょう園 毎週の行事

- 月曜日 のびのびルーム (自彊術)  
火曜日 のびのびルーム (映画会)  
水曜日 のびのびルーム (カラオケ)  
音楽療法  
自彊術療法  
木曜日 のびのびルーム (自彊術)  
金曜日 ピアノ教室  
陶芸教室 造形教室
- 第2火曜日 折り紙教室  
第1・3火曜日 書道教室  
第2・4水曜日 お話グループ・福寿草の会

#### せいりょう園 10月の行事予定

- 10月 1日(金) 開園記念日  
10月 2日(土) 園長との懇談  
10月 4日(月) 仏教講話  
共生の会  
10月18日(月) 美容の日(従来型)  
銭太鼓(良野老人クラブ)  
10月20日(水) 昼食会(お好み焼き)  
美容の日(ユニット型)  
10月22日(金) 郷土料理(ちゃんぽん風)  
介護についてみんなで語ろう会  
~感染症について~  
10月25日(月) 理容の日

#### せいりょう園 待機者状況

<平成22年 9月9日現在>

○入所判定済み者 364名

グループの内訳

Iグループ…127名/IIグループ…151名/IIIグループ…83名

○入所判定済み者の現在状況

在宅140名/特別養護老人ホーム入所中9名/医療機関入院中108名

老人保健施設入所中82名/ケアハウス入居中6名/グループホーム入居中11名/不明5名

辞退その他

死去3名

## 長谷川政夫さんの旅立ちに思う

介護相談室 ケアマネジャー 川西 文子

「どない言いよんのどい、そんなもんどないもあるかいや、ボロクソや（問題なく出来るという意味）」何度も何度も転倒して、その度に機能低下していくなかで、長谷川さんは私達に何度もそう言いました。段々と歩けなくなっていった時も、自分で立てなくなりポータブルトイレに移れなくなった時も、自分で起き上がれなくなり、お気に入りのベッドを諦めざるを得なくなった時も・・・自分が納得いくまでとことん頑張っ一つひとつそれらを受け入れていきました。

「大丈夫や」と頑固に言い張る長谷川さんを何度も説得しようとして怒られながら、私達スタッフは本人が納得いくまで付き合おうと決めました。

長谷川さんは平成7年12月にバリアフリーマンション『リバティかこがわ』で一人暮らしをスタートされました。その後すぐ体調不良により入院されましたが、退院後はヘルパー利用で身体・家事援助を受けながら、一人暮らしを満喫されておりました。平成20年に介護保険で要支援1となり、家事援助だけの生活となりました。

平成21年1月に小規模多機能型ホームが開設され、登録者には夜間の巡回や緊急コールのボタンが設置されるようになりました。当時要支援だった長谷川さんは対象外だったため登録出来ませんでした。その後要介護になり登録できるようになった時も、夜間のケアが必要になった時も、長谷川さんは今のままのスタッフに最期まで世話になりたいと言いました。何度確認してもいつも同じ答えでした。自分で動けない状態になり夕食後から朝まで誰も来ず、呼ぶ事も出来ない状況はさぞかし心細いものだったと思いますが、長谷川さんは弱音一つ吐かずにその状況を受け入れました。

転倒が続いていた頃、毎朝ヘルパーは何事も起こっていない事を祈りながら、長谷川さん宅のドアを開けました。そして何度も倒れている長谷川さんを発見しました。段々と自分で動けなくなっていった長谷川さんでしたが、「何も不自由な事はない」といつもスタッフにニコリと微笑んで「すまんのぉ、ありがどうな」と言ってくれました。

私達はそんな日々がまだしばらくは続くものと思っていましたが、長谷川さんはお盆の日の朝、9月の81回目の誕生日を迎えることなく急に逝ってしまいました。

告別式ではしばらく会えなかった娘さん達にも、高齢のご兄弟達にも、いつも慕って来てくれていた教え子さん達にも・・・皆に会えて、棺の中の長谷川さんは嬉しそうに笑っているようでした。

人生の最終章に近づいていく時、どうしようもない不安や恐怖心に耐えられない人、それと向き合っ一つひとつを受け入れようとする人等々、人それぞれでそれもまたその人の人生なのだと思います。私達はその一人ひとりが精一杯、最期の時期を生きられるように伴走していく・・・。自分達の仕事の大切さを改めて感じ、また、誇りに思っています。

講師 天台宗鶴林寺宝生院 幹敬盛副住職

今月の仏教講話は加古川町北在家、天台宗、鶴林寺宝生院 幹敬盛副住職に来て頂いた。当方の知識の無さからお寺さんを全て『ご住職』と紹介してきたもので、今回も案内板に『幹敬盛ご住職』と書かせて頂いていた。冒頭、鶴林寺のお寺について話される。「鶴林寺には三つのお寺があり(宝生院、真光院、浄心院)、夫々住職がいます。その時の最年長住職が『鶴林寺住職』を名乗ります。現在は私の父が鶴林寺住職を務めています。私は一番若く(38歳)四番目で副住職です。」お父上の幹 栄盛ご住職には当園仏教講話の開催に大変ご尽力頂いている。『せいりょう園』との係わりについては、平成8～9年頃ご自身が本山での修業を終えて戻られた頃、御祖父(老僧)がデイサービスを利用されていて、時折送迎されていたとのことであった。続いて気候の話題になる。今年の酷暑はさて置き、お寺への参拝者も、暑さ寒さの厳しい2、8月は少ないらしい。鶴林寺への参拝者が一番多い月は何月かと聞かれる。やはりお彼岸月の3、9月かな?と思ったら、さにあらず。実は6月で、その訳は6月に菩提樹と沙羅双樹(サラソウジュ)の花が同時に開花時期を迎えるからとのこと。ここでご持参頂いた写真(奇麗に開花した花と、現在の様子の両方)を見せて下さる。菩提樹は小さい地味な花で、一斉に咲いて一斉に散ってしまう。金木犀よりも少し上品な香りを放ち、今頃は8mm程の小さな実を結んでいる。釈尊が35歳の頃この樹下で悟りを開いたとされる。サラソウジュは椿科の白い花を咲かせるが、一日花とも呼ばれ、小さい蕾が時間をずらして咲いていく見事な花である。この暑さの中、給水設備が施されているが、葉はかなり枯れてきているらしい。サラソウジュはお釈迦さんが涅槃(ねはん:入滅時)された時、傍らに咲いていたとされる。お釈迦さんに大変ゆかりの深い花が時を同じくして開花する6月に多くの参拝者が訪れるのは納得です。ところが、いずれの花も文字通り『花の命は短くて…』の為、参拝者の中には、開花時期に神経質な人もあれば、折角やってきて、花を拝めず文句を言う人もあるらしい。ひどい人はお寺さんに文句を言ったり、花にあたりたりする。そんな様子を目にすると『花』も人間同様頑張っているのに、花が可哀想だと思ふ時があるとされる。きれいに咲いている時しか関心を持ってもらえない。「皆さんがサラソウジュだったらどうでしょう？」花が咲いているときは誰もが良いことを言ってくれる。散ってしまうと、関心を持ってくれない。それどころか文句を言う人さえいる。「皆さんにお願いがあります。」花も頑張っています。花が咲いていれば、ネギライと優しい言葉を懸けてやってほしい。そうでないときはハゲマシの心で接してやってほしいのです。花に対してそういう『ネギライとハゲマシ』の心を持てるようになれば、私たちの周りの人たちにも同じような気配り、思いやりの心を持てるようになる。目に入るもの、見えているものばかりが全てではありません。見えないもの、裏に隠れているものにも心を注いでほしい。今、自分の隣にいて、にこやかに笑っている人も、心の中には、枯れた、苦しいモノを持っているかも知れない。見るものにとらわれない優しい心を

育てましょう。心の中に花を咲かせましょう。それが『心の豊かさ』かも知れません。今の世の中を評して『物で榮えて、心で亡ぶ』と言う人がいる。見るもの、手に触れるものばかりが充実しても、豊かな心は芽生えないのではないのでしょうか。

有名な法華経の中に『諸法実相』(しょほうじつそう)という言葉がある。法とは存在するものを指し、「あるもの、存在するものの真実の姿を仏さんの目で、心でしっかりと見よう。」そうすれば、いろんなもの、世の中の本当のものが見えてくる。

話は蓮の花に続く。蓮の花は仏さんとは切っても切れない縁があるが、蓮は地下の泥の中に根を持つ。泥がないと育たない。泥の中から出てきて美しい花を咲かせる。辛さ、苦しさの中に根を根差して美しい花を咲かせる。そういうもの全てを愛でる目、心を養うことにより豊かな心(仏心)を持つことが出来る。そういう心を少しでも長く持ち続けたいものです。

最後に一句紹介された。室町時代の禅宗の僧：夢窓疎石(むそうそせき)の句で、僧が桜の名所の西芳寺(別名苔寺)に室町幕府初代将軍足利尊氏を迎えた時、すでに桜は散っていた。

その時詠まれた句が

“さかりをば見る人多し 散る花のあとを問うこそ なさけなりけり”

足利尊氏も我が意を得たりと、満足だったそうです。

記録更新45分間のご講話でした。有難うございました。機会があればまたお願いします。

追記：鶴林寺は『関西花の寺二十五か所』の第九番寺です。関西二府四県の中で、花にご縁のお寺で、兵庫県にはその内、七寺があります。サラソウジュの花で有名なお寺は他に、2寺ありますが、菩提樹のお寺は鶴林寺だけでした。勿論二種類揃っているのはここだけです。小・中学生の頃、毎年1～2回は写生会その他で訪れていた『古刹』。現在も毎朝早朝ウォーキングでお邪魔している『所』ですが、まだまだ知らないことが多いものです。

## ケアハウス等空き情報 <平成22年 9月13日現在>

### 《ケアハウス》

・ 恵泉	： 若干	・ 第二ケアハウス恵泉	： 若干
・ めぐみ苑	： 1人部屋1室	・ 双ヶ浦 御津	： 1人部屋3室
・ 香樂園	： 1人部屋1室	・ 青山苑	： 2人部屋2室
・ せいりょう園	： 1人部屋1室	・ あさなぎ	： 1人部屋1室
・ ケアハウスアザリ	： 1人部屋8室		： 2人部屋1室
	： 2人部屋1室		

バリアフリーマンション リバティかがわ 1室

[問合先]せいりょう園介護相談室 TEL(079)421-7156/(079)424-3433

## 介護についてみんなで語ろう会

テーマ「認知症サポーター養成講座」 8月27日(金)

せいりょう園老人介護支援センター  
社会福祉士 吉田 知一

今回の語ろう会は認知症サポーター養成講座を開催いたしました。

現在、認知症サポーター養成講座を受けオレンジリングを持つサポーターは加古川市で3300人を超えているそうです。加古川市の人口が現在26万人なので78人に一人は認知症サポーターであるという計算になります。街中で認知症サポーターに出会う確率はまだまだ少ないようです。少人数でも良いので、できるだけ認知症という病気を正しく理解していただけるサポーターが増えればと考えています。

### ○認知症サポーターは認知症を患っておられる方の「応援者」です

認知症サポーターは特別なことをする人ではなく、認知症について正しく理解し、認知症の人や家族を温かい目で見守る人のことです。では温かい目で見守るとは、どういうことなのでしょう。応援者にはどういう役割があるのでしょうか。

今回は、もし、徘徊中の認知症の方に道を聞かれた時に応援者である認知症サポーターのあなたならどう接することがよいか、皆さんに考えてもらいました。

その一連の会話を寸劇でやり取りしました。

徘徊中の認知症の方 Aさんに道を聞かれた時、認知症サポーターのあなたならどう接しますか？

### ○グループワーク

寸劇と同じように、あなたならどう接しますか？

- ・(寸劇について)実際はそんなに上手くいかない。話が噛み合わないし、興奮して手に負えないこともある。
- ・昔、徘徊の症状がある家族を介護していた時に、こっそりカバンの中に住所や名前が分かるようなものを入れておいた。
- ・徘徊している時に他人の家の花を勝手にとって行って、家族が謝りに行ったことがあった。
- ・本人と接しても売り言葉に買い言葉で民生委員ともケンカになるし、専門的な知識のあるヘルパーとも同じ人間なので口ゲンカすることもあった。
- ・入院中の病院から抜け出したことがあった。その都度家族に連絡があり、探しに行っていた。家に帰っていても、「家に帰りたい」と言って出て行ってしまう。
- ・夜中に冷蔵庫を開けて食べ物を勝手に食べてしまう。調味料まで食べてしまう。
- ・小さい頃の話は覚えているので、その頃の話聞いてあげると落ち着く。何回も同じことを話されても根気よく聞き続ける。
- ・レビー小体型認知症を患っているが、幻視・幻聴がある。家族はどうやって接したら良いか分からない。
- ・口からご飯が食べられなくなり、医者薦めで胃ろうにしたが、今度は胃ろうの人を受け



てくれる施設が少ないことが分かった。家族の思いとしては、こんなことになるのなら、自然な形で最期を迎えたほうが良かったのではないか、と思う。

### ○感想

寸劇で行った対応がすべてに当てはまることではありません。この場合、徘徊している本人が道が分からないので尋ねてこられていますが、ケースによっては目的を持って一生懸命に歩かれている場合もあり、必ずしも家に連れて帰ることがサポーターの役割ではないこともあります。納得できない本人は納得するまで何度も徘徊を続けるかもしれません。家に連れて帰り、徘徊を止めることが最優先になってしまうと、認知症の人が住みやすい地域とは言えないのだと思います。そういうケースこそ、温かい目で見守り応援することが必要なのだと思います。私たちと同じ社会人の一人として地域の中で懸命にチャレンジしている姿を尊重し応援していただくことが、「応援者」の役割だと思います。

### 次回の介護について語ろう会は？

9月24日      テーマ「施設入所にいたるまで」  
10月22日     テーマ「感染症について」

### 9月5日 和太鼓の様子



勇ましいバチさばきに見とれて  
しまいました



皆様も聞いているだけでなく  
自分で打ってみたいくなりました



## 平成 22 年度多職種連携研修会を開催して

せいりょう園老人介護支援センター  
社会福祉士 吉田 知一

9月10日に加古川市総合福祉会館にて多職種連携研修会を開催致しました。加古川市内では様々な専門職のスタッフが連携することを目的に開催されています。その研修会を紹介します。

### 多職種連携研修会とは

市内には、介護保険の事業者連絡会や職能団体が複数あります。各団体は、質の向上を目的に研修や情報交換を個別に開催はしていましたが、多職種間で研修を持つ機会がありませんでした。お互いの業務、役割が理解できずに誤解が生じることもあった為、互いの専門性を再確認し、気づきと発見の中から多職種による連携についての合同研修会を開催したことがはじまりです。今回も2市2町地域ケア協議会、加古川地区介護支援専門員協会、2市2町訪問看護ステーション連絡会、市内訪問介護事業者連絡会の各代表の方と共に企画し開催に至りました。

### 介護の現状

老いの過程は、若い頃なら簡単にできていたことが徐々にできなくなり、やがては死に至る、生あるものにとって必然的なことです。死は避けるべきリスクではなく、自らの人生を締め括るゴールです。しかし、現実にはゴールを前にして私たちの手から離れてしまうことが多く支えきれていないのが現状です。一方で、介護保険制度が始まって以来、利用者の権利意識が強くなり、事業者の管理責任のみが全面に出て、事業者側の安全配慮義務が最大限に求められます。そういう風潮から様々なクレームが寄せられ、紛争が生じ、訴訟にも発展することがあります。

### パネルディスカッション

今回の研修会は「人生のゴールを支える看取り介護」というテーマで開催させていただきました。参加されている専門職はケアマネジャーが一番多く24人、続いてヘルパーが23人、地域包括から11名、施設関係の職員が20名、訪問看護、病院のソーシャルワーカー合わせて6名、薬剤師会から3名参加していただき計87名、文字通り多職種の専門職が集まる研修会になりました。

内容は、パネルディスカッションという形で医師、ホームヘルパー、訪問看護師、地域包括支援センター、ケアマネジャーなどの専門職の方に看取りの事例をもとに多職種の関わり、家族との関わりについて話し合いました。

#### 「人生のゴールを支える看取り介護」

施設でも在宅でも看取り介護を行うに当たって、選択肢があまりない状況の中で介護しているケースが多いかと思います。様々な看取りの形があることを、パネルディスカッションでお話することで、私たちの看取りに対する介護の在り方を考えるきっかけ作りが、今回のねらいでした。

その人の人生のゴールまでを支える為に様々な専門職が関わっています。介護保険制度の中で、専門職がどのように伴走することが適切なのか、お互いの専門的な視点だけではなく様々な視点からの議論をし、互いの専門性を認めた上で介護の仕事のものさしとは何かを確認していければと思いました。